

森の木魂（こだま）

2021年4月24日発行 第2号



・世紀末の生存を安定させたい私たちのジャンプ…………… 1	・人が作り出した気候変動……………10
・東日本大震災 10 年とコロナ禍の日本…………… 2	・命を育む里山に育て！日光板橋の「城山の森」……………11
・原発事故はまた起きる…………… 4	・ありがとう桜たち……………12
・この地球で生きていくための働く者の森づくり…………… 6	・生き物ということを考えてみたい……………13
・悲しみを胸に、民族文化と森を育てる…………… 7	・働く者の心を宿した希望の森を育てたい……………14
・森作業 1 月～3 月・生きものと共存する知恵くらべ…………… 8	・春が一度にやってきた！……………15
・森びと「里親植樹」にご協力ください…………… 9	・森は友だち・編集後記……………16



世紀末の生存を安定させたい私たちのジャンプ

入学や入社など新たなスタートに花を添えてきた桜が、今では卒業を祝う桜へと変化しています。桜の花を見ていると希望が湧いてきますが、コロナ禍ではそんな気分も薄くなります。一方、桜や木々は生息環境の急変に適応しきれないのではないのでしょうか。この変化の先には何が待っているのでしょうか。自然界が人間に訴えかけている事を見落としてはならないと思います。

この文章を書いている時、オーストラリア東部では、3月18日からの豪雨でダムの水が溢れ、半世紀ぶりの洪水被害が発生しました。この地域は長期間の干ばつの後、前例のない大規模な森林火災が起きていました。一気に、大切な土砂が流されているようです。

私たちは、地球温暖化にブレーキをかけようと二酸化炭素吸収源の森づくりに汗を流していますが、一市民の活動では巨大化している異常気象のスピードには追い付きません。世界中の人々が温暖化にブレーキをかけていく活動をジャンプアップさせなければならないようです。

昨年10月26日、菅義偉首相の所信表明演説では「2050年温室効果ガス排出実質ゼロ」と宣言し、「省エネルギーを徹底し、再生可能エネルギーを最大限導入するとともに、安全最優先で原子力政策を進めることで安定的なエネルギー供給を確立する。長年続けてきた石炭火力発電に対する政策を抜本的に転換する」と述べました。

関係省庁はその具体策をまとめていますが、その案は私たちに何を求めてくるのでしょうか。

毎年、豪雨、猛暑、台風そしてドカ雪に怯える暮らしはこりごりです。早めに対策を講じなければなりません、その政策が個人に負担となって現れることが心配です。開発には莫大な予算が使われますが、開発された商品を暮らしに取り入れるのは私たちです。

化石燃料使用の自動車からEV車・水素カーへの買い換え、住宅のエコ改造などの負担は誰もがができることではありません。しかし、このままの暮らしを続けると世紀末には生存が不安定になると世界の多くの学者・研究者は警鐘を鳴らしています。私たちの基盤の問題ですので、他人事ではありません。同時に、この問題は極めて政治課題でもあります。その上、私たちは環境税を国や地方行政に収めていますので、その使途を野放図にするわけにはいきません。

3月2日、一般会計予算委員会分科会（農林水産省及び環境省所管）で当会の政治アドバイザー・山崎誠衆議院議員が質問に立ち、15年間の森づくり経験から、市民参加の森づくりの大切さを紹介し、2050年CO2排出ゼロに向けて、化石燃料や原発依存から再生可能エネルギーへの政策転換を小泉環境大臣に求めました。県や市町村は「2050年排出実質ゼロ」に向けてどんな政策を審議しているのでしょうか。私たちは、温暖化防止の要望を地域で話し合い、その案を国や地方行政に届けます。県ファンクラブの皆さんと一緒に、地球温暖化にブレーキをかける活動をすすめませんか。

森びとプロジェクト副代表・清水卓

オピニオン

東日本大震災 10 年とコロナ禍の日本



昨年の足尾・松木沢のサクラ

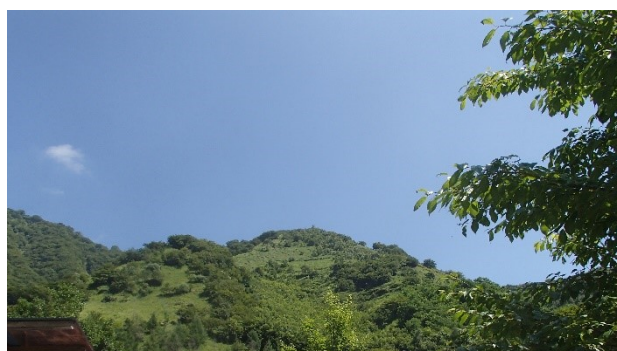
私は東日本大震災の一年後に、教え子二人と岩手の大槌町から三陸海岸を下り、福島以南相馬市まで、見て回りました。津波の爪痕は港や街中でむごたしく、建物の鉄筋が鉛のように曲がり、車は原形をとどめていませんでした。鉄道のレールは折れ曲がり、軌道から外れて宙に浮いていました。1階部分はすべて持っていかれ、2階部分がかろうじて残っていた家屋もありました。巨大な堤防は巨大な波に押し戻されて、ゴロゴロ転がっていました。津波のすさまじさを目の当たりにし、亡くなられた1万8千人のご冥福をただただ祈るばかりでした。

自然の再生能力に驚き

被災地を見て回って、港や町の津波被害の甚大さと対照的に、自然の海岸線はよく観察しない限り爪痕を見つけるのが難しいことに気が付きました。塩水に浸かったスギ植林やマツの防潮林は枯れ始めていましたが、海岸線の斜面にはアカマツを交える夏緑樹林が残り、土砂崩壊もほとんど起きていなかったのです。海岸断崖の森は普段から潮を含む強風にあおられており、耐性ができているのだと思います。

南相馬市の海岸では、洗掘された堤防の後ろには引きちぎられたクロマツの幹と水田が堆積物で埋まっていたのですが、2013年7月に再度訪れたときは、

堤防の後ろに水が溜まり、コガマ、ヒメガマ、フトイ、サンカクイ、コウキヤガラ、ミズアオイ、ミソハギ、砂地にはハマエンドウとハマヒルガオが生え、1年前と較べて自然の再生能力に驚きました。南三陸の海ではアマモやアラメが茂るようになり、魚介類が戻ってきているそうです。このような自然の回復力を見ていると、この大規模津波も自然界では織り込み済みの自然の営みの一つであると確信してしまいます。人々もまた、潜在的に持っている天変地異に対する「諦観」という諦めの理由や原因をしっかりと認めていることも同じで、きっと乗り越えていけると信じています。地震や津波は抑えられなくとも、その後の対応に知恵を出すことが被害を軽減していくはずです。





生存の基盤となる生態系を中心としたパラダイムへ

コロナ禍は世界で起きている厄災で、目に見えない微細なウイルスが人類の築き上げた世の中を混乱に陥れています。また地球温暖化も地球規模の現象で、いずれも自然への干渉から引き起こされた自然からのしっぺ返しと言えるでしょう。こちらは人類が根本から悔い改めなければなりません。その時代において当然のことと考えられていた社会全体の価値観が根底から変化してしまうことをパラダイムシフトといいます。今、このパラダイムシフトが求められているのだと思います。

ヨーロッパに端を発した産業革命以降、人類は物の豊かさが幸せをもたらしてくれると信じてきました。様々な経済活動から経済至上主義が生まれ、自然は征服できるもの、コントロールできるものとして、人々は自然を壊し続けて来ました。その結果、森林は後退し、生態系が損なわれて、生物の多様性は失われ、環境の変化が余儀なくされているのです。地球生態系の安定に欠かせない森林が消え、森林生態系に取り込まれていた太陽エネルギーは行き場を失って地球上をうろつき、輪をかけて温暖化で宇宙に戻れないエネルギーとあいまって、大きなアンバランスが異常気象となって災害をもたらしています。

SDGs の目標にある持続的な発展には格差社会を無くし、一人の取りこぼしもなく、皆でゴールを目指すという意が込められていますが、前提として、持続的な生存の基盤の保障が必要です。その基盤とは生態系で、人間も含めた生物が生活するための環境、利用する物質とエネルギーのバランスを保つという複雑系をやっているのが生態系なのです。

一本でも多くの木を植え続けよう

生態系の保全に必要なのは失われた森林の再生、そのためには自然の許容範囲の中で暮らしの在り方を考えることが大事で、自然と対立してきた経済至上主義を捨て、人が自然の豊かさを感じ取れるようになること、それを生活の基盤にする新たな社会の仕組みづくりにすることです。

一人ひとりの力は小さいかもしれませんが、また、長い時間がかかる活動になるかもしれません。皆様のお知恵もお借りし、国や地方行政だけでなく経済界に私たちの意見を届け、また、一本でも多くの木を植え続けていきたいと考えています。多くの方々にその仲間になっていただくことを改めて呼びかけます。

森びとプロジェクト 代表 中村幸人

東日本大震災から 10 年

原発事故はまた起きる

東京電力福島第一原発事故から 2021 年で 10 年になります。振り返ると 21 世紀初頭の人類は、ほぼ 10 年ごとに大きな出来事に見舞われてきました。2001 年 9 月の「アメリカ同時多発テロ」とそれに続く対テロ戦争、2011 年の東電福島第一原発事故、そして 2020 年の新型コロナウイルス感染症(COVID-19)によるパンデミックです。

テレビや新聞では毎日、感染者数と死者数が報じられます。世界の感染者数はすでに 1 億 2000 万人を超えました。死者数が 300 万人を超えることは確実です。スターリンはかつて「一人の死は悲しみだ。しかし 10 万の死は統計だ」と語ったといわれます。

日々メディアが伝える報道の内容は、まさに統計でしかありません。300 万の死は 300 万の何倍もの大きな悲しみであるという感性を、人類は失ってしまったのでしょうか。

福島第一原発事故も同様です。レベル 7 という世界最悪の事故だったにもかかわらず、幸い放射能による急性障害で亡くなった方はゼロでした。当時、原発を推進する専門家の中には、「これで原発の安全性が証明された」と語った方がいたほどです。

しかし逃げ遅れて看護を受けられずに亡くなった方、土地を奪われ、仕事を失い、絶望して死を選んだ方など、いわゆる「原発関連死」は 2300 人を数えるのです。避難した方々はピーク時 20 万人近くにのぼりました。

政府やメディアは軽々しく「復興」という言葉を使います。夏の東京オリンピックも「復興五輪」と銘打たれています。しかし失われた命、汚染された大地、断ち切られた社会は二度と「復興」しない現実を直視すべきではないでしょうか。原子力緊急事態宣言は今も出されたままなのです。

今年 1 月は日本海側でたびたび大雪に見舞われました。各地で車が立ち往生し、大渋滞が続きました。数年前、私も新潟県にある柏崎刈羽原発取材した帰りに、三国峠で雪のため 2 日間、立ち往生しました。

原発を再稼働するならせめて「原子力防災」、つ



まり逃げる手はずだけは整えておいて欲しいと思いましたが、雪に閉ざされた車の中で「それは不可能だ」と確信しました。

柏崎刈羽原発の 30 キロ圏には 40 万人を超える人々が住んでいます。雪が降れば車で逃げることはできません。しかも 40 万人を避難させる業務にあたる柏崎市の職員は 4 人しかいませんでした。

福島第一原発事故の後、新たな指針によって規制基準が厳しくなっているとされています。かつては安全神話のもと、放射能を閉じ込める最後の砦となる「格納容器」は壊れないことになっていました。想定された「重大事故」も、想定しえない「仮想事故」も、格納容器の破損を想定していませんでした。

しかし福島では 1 から 3 号機で格納容器が破損し、大量の放射能が環境中に放出されたのです。では次に格納容器が壊れるような事故が起きたらどうするのか。「世界で最も厳しい規制基準」と安倍首相が胸を張った新規規制基準では、吹き上がる放射能を放水砲で撃ち落とすことになっているのです。ただそれだけです。B29 の爆撃に竹槍で向かった精神と全く同じレベルの発想です。

放射能は雪に沈着します。被ばくの約 7 割は、実は地表に沈着した放射能からのものです。想像力を働かせてください。皆さんが雪に閉じ込められる中、原発事故が起きたらどうしますか。雪が降るのは日本海側だけではありません。

はっきりと申し上げておきますが、原子力という「技術」が悪いわけではありません。人類の叡智はやがて放射能を無力化する技術を手にするかもしれま

せん。また月や火星に行く時代になれば、エネルギーとして原子力技術は不可欠となるでしょう。

しかし「原子力発電所」を安全に運転できるような自然環境に日本は置かれていませんし、原子力エネルギーをコントロールできる技術力もパワーも人材も日本にはありません。4つのプレートが重なり、地震、火山、津波の呪縛から逃れられない日本列島を取り囲むように、かつて54基の原発があったことが本当に信じられないくらいです。

忘れもしない事故直後の2011年3月12日、私はすでにニュース部門を離れていましたが、会社へ呼び出されて解説を担当することになりました。3月14日には3号機が爆発する瞬間を、モニター画面で目の当たりにしました。その夜、2号機が「空焚き」になったと発表された時、心底「日本は終わったな」と思いました。

幸い日本は終わりませんでした。もう一度チャンスをもたらったのです。今はもう原発の「賛否」を論じている時間はありません。原発に依存しない国をどのように構築するのか、叡智を絞らなければなりません。

自分を「原子炉」に見立てて、フィクションとも実話ともつかないこのユニークな本を書いた加藤就

一と私は、実は日本テレビの同期なのです。私の方が5つほど年上ですが…。加藤は古き良き日本テレビの伝統を受け継いでいます。「木曜スペシャル」や「アメリカ横断ウルトラクイズ」がディレクターとしての加藤の名を世に示しました。最高の「女たらし」でもあります。

「日テレドキュメント」の制作では常にプロデューサーと激しく衝突しました。それほど原発にかけの加藤の思いは強かったのです。この本の企画を聞いた時、乱暴で情熱だけで書かれたような加藤の脚本を思い浮かべ、「どうせつまらん本になるだろう」と高を括っていました。

ところが出来上がった文章をみてびっくりしました。ここには「原発の嘘」という名の「真実」が満載されていたのです。この本には「事実」をベースとしたフィクション、あるいはフィクションの形を取ったファクトという新しい世界が広がっています。

加藤の願いは大多数の日本人同様、原発依存から脱却することです。しかし彼は「脱原発」を声高に叫ぶことなく、「原発」という名の自分に「ウソ」という「真実」を語らせているのです。

この本を読んだあなたがどう感じ、どんな行動を起こすかが大切です。もし万が一、あたかも何もなかったかのように原発依存を続けるなら、事故は必ずまた起きるでしょう。起きるはずのないことでも起きるのですから、一度起きたことがまた起きるのは必然です。原爆が二度落とされたように…。

原発依存を断ち切ることができれば、日本の未来は輝き続けるでしょう。それを決めるのは政府ではなく、あなたなのです。

森びとアドバイザー・倉澤治雄



「中国、科学技術覇権への野望」

倉澤治雄著 中公新書ウレ 946 円

「ごめんなさい、ずっと嘘をついてきました。」

加藤就一著 書肆侃侃房 1760 円

倉澤治雄

1952年千葉県生まれ。科学ジャーナリスト。東京大学教養学部基礎科学科卒業。フランス国立ポルドー大学第三課程博士号取得（物理化学専攻）。日本テレビ入社後、北京支局長、経済部長、政治部長、メディア戦略局次長、報道局解説主幹などを歴任。2017年から独立。

森の仲間たち

この地球で生きていくための働く者の森づくり



私は昨年暮れ、新生「森びとプロジェクト」の会員になりました。どうぞ宜しくお願い致します。仲間たちにも加入を呼び掛けたところ、多くの仲間たちが主旨を理解し、呼びかけに対して応えてくれたことに大変感謝します。

私が「森びとプロジェクト」に心が動いたきっかけは、毎年巨大化している想定外の異常気象が労働現場を脅かし、社員にとっては雇用不安や生活不安につながり、鉄道利用者にとっては不便と不安をもたらしたからです。

2016年の台風が北海道に上陸し、豪雨が襲い、JR北海道の地方線はズタズタに寸断され、線路は崩れ去りました。この自然災害は地方線の存続の有無と雇用問題が地域住民と労働組合の厳しい課題になりました。3年後の2019年には、台風19号の豪雨で千曲川の堤防が決壊し、「長野新幹線車両センター」が災害に遭いました。車両基地の在り方等が労使協議の課題になりました。また、去年はコロナ禍によって私たちの労働・生活環境で、社員の健康管理と鉄道利用者の感染防止という課題が突き付けられ、人間の生存ということを考えさせられました。

言うまでもありませんが、私たちの日々の活動は自然の力に規定されています。それは新型コロナウイルス感染のパンデミックで明確になりました。見えないウイルスの猛威は、250万以上の命を奪い、世界市場経済を悪化に追い込み、その結果、働く者

の生活が脅かされています。ワクチン接種が開始され、経済は回復する兆しを見せていますが、ウイルスが地球上からなくなった訳ではありません。地球が「灼熱の地球」になってしまうと永久凍土や氷河の中に潜む未知の生きものが新たな宿主をもとめて蠢くのではないかとされています。

人間は、生き延びていくために、自然の物質を意識的に頭や腕や足を使って運動させて、生産物を得し、消費・排泄しています。この行為を繰り返して命を持続させています。生存に欠かせない自然の物質が想定外の異常気象によって不安定になっています。豪雨、熱波や干ばつ、森林火災そして大寒波等で自然力が衰弱しています。この要因は人間社会の行き過ぎた経済活動にあると言われています。その一場面が異常気象と新型コロナウイルス感染という「複合災害」として現れています。

人間の生存を持続させていくためには自然とは全く無関係ではないということを見失ってはならないと思います。私たちはこの「複合災害」に向き合い、平和で安心できるポストコロナ社会を描いていかなければならないと思います。

まずは、森づくりの現場、労働・生活環境や職場現実に立ち、「私たちの生活は自然と無関係ではない」ことをあらためて実感していきたいと思います。

会員 佐藤英樹

森の仲間たち

悲しみを胸に、民族文化と森を育てる



東日本大震災・東京電力福島第一原子力発電所事故発生から10年を迎えました。私は、この大震災の津波で妻、息子、娘、母を亡くしました。息子と母はいまだに見つかっていません。太平洋の彼方に流されているのだと思います。

私の家は、波際から300メートルの場所にありました。一人暮らしのこの10年間、折にふれては、海に向かって手を合わせ、冥福を祈り、私のことを見守ってくれと祈っています。震災からもう10年も経ちましたが、私にはその実感がありません。

ひとりぼっちで家にいる時は、今までどれだけ家族に助けられていたことに気づき、年を重ねていく度に、これからどう生きていけばよいのかと思うと心細くなり、不安な心から消えることがあります。淋しさ、悲しさ、悔しさはこれからもなくなりますが、この思いで生きてゆくことはとても辛いです。

復興、復旧だとして、再び元通りの地域や街にしようと色々な事がすすめられています。私の場合は、いくら時間が経っても元通りの心にはなりません。失われた家族や思い出の品、大事なものは戻ってきません。今年、誕生日がくると古稀です。精神的、肉体的なこと、また経済面などの心配事が消えず、不安な毎日を過ごさなければならないのではないかと心配しています。

現在は、復興集団移転で、平屋の家を建て、庭先で家庭菜園もどきを行い、野菜や花を育て、収穫すると近所の人や友人・知人にあげています。

また、震災前から協力している地元の国指定重要無形民俗文化財の「相馬野馬追まつり」には出陣していますので、今は、野馬追に必要な武具や馬具の製作や修理なども行って、不安な気持ちを晴らしています。この野馬追の継承と発展には身体が動くうちは微力ではありますが、継続していきたいと思っています。

民族文化を継承していける心を支えてくれるのが森づくりボランティアです。最近、自然災害が多発しているように思います。このような中で、8年前から南相馬市の復興事業のひとつである「鎮魂復興市民植樹祭」の応援と、その後の森の防潮堤を育てる活動をしています。30歳代の若者と同年代の皆さんで、通年に渡って、植えた堤防の草刈りと補植、補植するための苗を育てています。

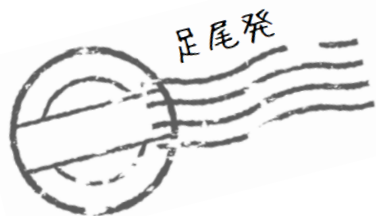
育てている森の防潮堤の木々の生長を観ていると、また、ボランティア活動している市民、それをサポートする市役所職員達との活動は私の気持ちに英気を与えてくれています。人の心と自然の恵みに感謝しています。

南相馬市鎮魂復興市民植樹祭応援隊
副代表 菅野長八



足尾発

森作業 1月～3月・生きものと共存する知恵くらべ



初めて体験する新型コロナウイルス感染禍での森づくり活動は今年2年目に入りました。この時季の森作業は、足尾・松木沢に棲む生き物たちとの共存を護る活動がメインとなります。人間の都合だけで考えない、獣害対策を施すことに重点をおきます。鹿、猿、ウサギ、ネズミたちから食べられる樹皮や冬芽等の害をチェックし、その防止策を考え、強化します。

生きものは柔らかい樹皮を好むようで、植えたばかりの幼木を食べます。今年に入って、植樹を行っている「白沢西の森」の被害をチェックし、鋭く噛み切られた幼木が多いことからして、ウサギの侵入を防ぐために、目の細かい金網を柵に張り付けました。

自然の恵みをいただく知恵だし

春になるとポット苗は水を吸い上げます。その水は自然の恵みの沢水です。いつでも水が流れているとは限らない沢、今年はその沢の水が少ないようですので、水をタンクに溜めて苗床まで流す知恵を出し合ってきました。地中に沁みこんでしまう水を少しでも頂こうと、オイルの空タンクを再利用して、水を溜めることにしました。

ここ数年、大雨毎に沢が蛇行するようになりました。その度に、給水タンクやホースが詰まることが多くなり、足尾でも大雨の影響によって余計な作業が増えてしまっています。

森と触れ合う散策路整備

森から遠ざかっている生活が多い方々に、荒廃地に育てている森に触れていただき、自然の不思議や魅力を体感してもらうことができる足尾・松木沢の

森。私たちは、木を植えて16年経った急斜面の「白沢の森」、様々な生きもの達が息づく松木村跡地の「松木の杜」と「民集の杜」を案内したいと、その散策路の整備を進めています。

散策希望の方々とスタッフやサポーターが案内できるよう準備しています。時間と場所は希望に沿って無料で案内します。何を感じ取るかは散策する方の自由で、案内役は怪我や事故に遭わないように注意するだけが仕事かもしれません。

若葉の輝き、ネムノキやコウゾのしなやかな花、シロスミレの花と虫、夏のヤマユリの花、そしてヤマモミジの紅葉を案内したいと考え、その路を整備しました。



4月から始まる里親植樹の準備

コロナウイルス感染不安、足尾に行きたいが時間や交通費が掛かりすぎる。でも木を植えて少しでも温暖化にブレーキをかけたいという要望に応えようと、植樹希望者によってスタッフが木を植える「里親植樹」。その準備を行いました。

「白沢西の森」の急斜面に土留め柵を造り、黒土と腐葉土で土壌をつくりました。また、土留め用の板と鉄筋や、土壌を作り変えるため、10キロと2キロの黒土と腐葉土を担ぎ上げています。その周囲には、柵の外側にウサギが侵入できないように金網を張りました。

森づくりチーム

森びとのお知らせ

森びと「里親植樹」にご協力ください

森びとが代わって「植樹」をします。

森びとプロジェクトでは、みなさんに代わって木を植える森びと「里親植樹」を始めます。

「木は植えたいけれど、都合は合わないし・・・ましてや今はコロナだから・・・」など、さまざまな理由で植樹したいけれどできない方は多いと思います。そのような方々に代わり、頂いた費用で森びとのベテランスタッフが山に木を植える活動を、森びと「里親植樹」※と名付けました。

1口1,000円で1本、受付は常時行い、月に1度、森びとが責任を持って植樹を行います（期間は5月～10月の半年間）。植えた木々の管理も成木になるまで（最低3年間）は森びとが管理します。

植樹場所は「白沢西植樹地」、栃木県足尾の荒廃地です。鉾山の煙害によって生まれた足尾の荒廃地は、言ってみれば人間の経済活動が生み出した森林破壊の象徴ともいえる場所です。ぜひみなさんのお力をお借りし、少しでも森に還す活動を広げていきたいと考えています。

※お申込みいただいた方が、植えた木々の持ち主になるわけではありません

概要

森びとプロジェクトが皆様に代わって木を植え・木を育てます。申し込まれた方には植えた木と育樹地の写真と植樹証明書をお送りし適時報告します。

植樹地について

栃木県日光市足尾・白沢西植樹地（古河機械金属株式会社よりお借りしている場所です。）

費用

1口1,000円

（黒土購入費・育樹作業のボランティア保険・植樹者燃料代などに充てられます。）

お申込について

お名前、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、メールアドレス、口数を記載の上、森びと事務局までメールかファックスでお申し込みください。個人情報については、里親植樹及び森びとプロジェクトからののお知らせ以外では使用いたしません。



期間と植樹日

毎年5月～10月

お支払先

ゆうちょ銀行振替口座：00140-2-364527

他金融機関からの振替用口座：店番 019 当座 口座番号 0364527 モリビトプロジェクト

※大変恐縮ですが振込手数料は自己負担でお願いします。

植える樹種について

土地本来の樹種を植樹場所に合わせて森びとが選定します。

植えた木々の管理について

成木になる3年間は周辺の草刈り、獣害管理を実施します。木々の成長については定期的にお知らせする予定です。

その他

苗木代については、公益財団法人イオン環境財団からの助成金を使用しています。

たくさんの皆さんの支援をお待ちしています。

いま、気候変動で世界は危機に瀕しています。その元凶、CO2を封じ込めるための最も有効な手段が「植樹」です。地球のため、愛する人のため、これからの世代のため、ぜひたくさんの木を増やすこの活動にご協力ください。詳細につきましては事務局にご連絡頂くか、森びとウェブサイトをご覧ください。

広報チーム

ストップ気候変動

人が作り出した気候変動

気候変動の要因は？

3月中旬、東京都内ではソメイヨシノが満開となりました。4月の入学式や入社式場を華やかに、式の主役には新たなスタートの背を押してくれる生活の時期は変えなければならぬようです。

さぞかし桜も驚いていることでしょう。10 数年前頃から、今までの生活感の変化を感じています。梅雨から初夏は局地的豪雨と洪水、夏は猛暑日と熱中症、秋は巨大台風と大雨、冬は九州地方から日本海沿い地域での豪雪等。これまでに経験したことのない気象現象によって、住宅、ライフライン、農漁業等が被災し、その被害は年々拡がり、増加しています。この社会現象は世界中に起きています。その要因は人の暮らし方にあるようです。

温暖化にブレーキをかけることは待ったなし！

いうまでもありませんが、私たちがこれからもこの地球上で生存し、人間社会を持続させていくためには、様々な動植物、肥沃な土壌、清浄な水、そして澄んだ空気など、生態系を含む健全な生物圏を維持しなければなりません。しかし、この生物圏が私たちの度が過ぎた経済活動によって衰弱しているようです。その原因は地球の灼熱化です。このままの暮らし方を継続していくと、世紀末には世界 90 億人もの生存が不安定になると言われています。

私たちは、多様な文化と全生物種と共存する生物社会の一員であるということを改めて認識し、今までの生産と消費の在り方等の秩序を変革させていかなければならぬようです。そのアクションは“待ったなし！”です。

原点に立ち返った活動を

世界中で本格的に動き出した温室効果ガス排出 2050 年ゼロ。日本も昨年、その「宣言」を発し、世界の仲間入りを目指しています。けれども、コロナウイルス感染対策で見られた経済優先の考え方では、私たちの健康と命の不安がつきまといまいます。自然界は人間の都合を待ってくれません。世界中の人々の暮らしを脅かしている異常気象の要因は海水

温度の上昇があるようです。深海の海水と表層の海水が攪拌するには 1,000 年以上がかかります。さらには、毎年、大気圏に溜まってしまう二酸化炭素は 100 年経っても 4 %が大気圏に残ります。2020 年は 5 億トン（同年排出量の半分）が大気圏に残ってしまいました。

これからも地球で生存していくためには何をなすべきか、という時代を迎えた私たち。温暖化防止のために私たちは納税していますが、その用途は良く分かりません。温暖化防止だとして高額な電気自動車は買えない等、今までの暮らしを見直すことが求められてもそれに応えるには難問が山積という状況の私たち。人の生存の問題と言っても、何をなすべきかと言われても心に残るは先行きの不安ばかり。

私たちの地球温暖化にブレーキをかける活動はここからスタートします。春から年内は山に木を植え、心には温暖化にブレーキをかける活動を行っていきます。各県ファンクラブと共に、地域の皆さんとその心をひとつにしていきたいと思います。会員の皆様のご支援をお願いします。

広報チーム



ファンクラブ通信

命を育む里山に育て！日光板橋の「城山の森」

森びと栃木県ファンクラブは昨年、栃木県日光市板橋地区の城山で桜の木 23 本、落葉広葉樹 1,000 本を植えました。

この山は、（株）大和木材様が所有する山林で、この地に植樹をしようとなった経緯は、社長の福田彦一郎さんがスギ、ヒノキを伐採した跡地に、広葉樹を植えてみないか、と言ってくださったことから始まりました。

この山は、福田さんが子供の頃は、落葉広葉樹が育つ、いわゆる里山であり、山の恵みを享受した暮らしをしていたそうです。その後、国の造林政策によってスギ、ヒノキへの転換が図られたところ、安い外材が出回り、林業が衰退し、素晴らしい材のスギ、ヒノキは放置されて、森林のもつ様々な保全機能を果たせなくなっていると言います。

福田さんは、人の暮らしにとって欠かせないこのような森の状況を嘆き、地元の小学生たちに暮らしと森のかかわり、木々との接し方等を教えています。また、“木を植える。木を育てる。木を使う。”という循環を暮らしに根付かせる事業を進めています。

私は、この考え方に感銘し、福田さんからの落葉広葉樹を植える提案を受け入れ、昨年 7 月と 10 月に木を植えました。福田さんは、山の頂上から下の 3 分の 2 にスギ、ヒノキを植え、50 年後には伐採し、また木を植えると言っています。私たちは、そ

の植林された場所の上部に落葉広葉樹を植えました。

山頂までの稜線は登山者が脚を鍛える場所でもあり、地元の方々の散歩コースでもあります。その稜線にはオオシマザクラなどの桜を植えました。今年の早春、河津桜が花を咲かせてくれました。花の数は少なかったのですが、植樹の準備を進めてきた仲間たちは大喜びでした。



間もなく、城山の幼木たちは若葉を広げ、小さいながらも新緑を輝かせ、今秋には紅葉を見せてくれるのではないかと今から楽しみにしています。足元には、ヒガンバナも植えましたので、花の名所にもなってくれるのではないかと密かに期待しています。

城山の木々が大きく育ち、人と森が寄り添って暮らす里山になってくれることを願っています。雨水を溜め、ミネラル豊富な水を田へ供給する森。木々の柔らかな香りに満ちたきれいな空気をはじめとする山の恵みを与える森。そんな豊かな森に育って欲しいと願っています。勿論、僅かですが二酸化炭素も吸収してくれるでしょう。

これからも、たくさんの森仲間たちとの森作業が、この城山でできるのを楽しみにしています。

栃木県ファンクラブ 加賀春吾



城山に咲くサクラ



城山から日光連山を望む

森の仲間たち

ありがとう桜たち



足尾のサクラ

去年の札幌雪祭りの直後に、北海道で第1号の新型コロナウイルス感染者がでてから、はや1年以上がすぎました。全国初の緊急事態宣言が出た途端、近所の店々からマスクや消毒液が消滅。人々が店頭で列を成すありさまに呆然としつつも、札幌や小樽、北見のようなクラスターが発生しない分、ここはまだ大丈夫かも。と半分安堵していた11月、突然旭川に大きなクラスターが発生しました。

毎日、全国ニュースのトップで報じられる我が街の姿。旭山動物園をテレビで見ることには慣れていても、市内の基幹病院が寒々とした雪景色をバックに画面一杯に現れるのには衝撃を受け、日々増える感染者に愕然とし、もう旭川の全病院が機能しなくなるのでは、と戦々恐々となった頃、やっと数々の対策が施され、それなりに落ち着いて年明けには、ほっと胸をなでおろしたものです。しかし、いまでも札幌などで変異種感染などが相次ぎ、決して安心できる状態ではないことを考えると、日々の不安は続いている今日この頃です。

そんな中、わたしは先日ドライブにでかけました。例年に比べ積雪の大変多かったこの冬ですが、さすが3月に入ると雪解けも進んだ上、その日に久しぶりに抜けるような青空が広がったのです。行先は旭川近郊の江丹別・・・「旭川MS会」が27年間に亘って桜を植え続けた場所です。30年前に喫

茶店の女性達のお喋りから生まれたMS会は「後世に美しい自然を！」をモットーに活動しましたが、諸事情（江丹別地域永住でお世話をしてくださる方や事務局高齢化）のため継続を断念して6年が経ちます。でもわたしは時折、こうして桜の様子見に行くのです。

まだ3メートル近い硬雪の斜面には、15～16年前に植えた20～30本の山桜が雪で枝を大きく垂れ下げながらも懸命に立っているのが目に飛び込んできました。そして、その根元には木の輪郭をなぞるように円、地温が上がってくるとみられる現象で根開きといい、まるで春の足跡のようです。一面の白い雪景色の中、木の根元が丸くぽこっと開いている様には思わず笑みがこぼれます。

約30年の間、北海道でも寒さと雪が特に厳しいこの地域では、植林しても雪で枝が折れたり、鹿に食べられてしまったりした桜の木が大半なのですが、残った逞しい木々たちは、コロナ禍が続くこの世の中で、今年の春も美しい花を咲かせてくれることを約束するかのような神々しさにあふれていました。

「わたしも頑張るよ。5月の花見にまた来るね！」桜たちにつぶやいて車に戻る。わたしの足元は軽やかです。ありがとう桜たち！

会員 本田雅榮

心のふるさと探し

生き物ということを考えてみたい



キレンジャク・写真：林子

今年3月下旬の足尾・松木溪谷入口のシダレザクラは蕾を膨らませていました。以前にも書いた覚えがありますが、15年前の足尾町の桜は、ゴールデンウィークが満開でした。

今年の桜の開花は、全国的に観測史上最速でした。3月下旬には夏日もありました。朝は霜注意の予報が出されましたが、昼は夏日でした。今までの生活感覚が通用しない日々を過ごしています。

3月下旬、足尾に熊が現れたという話がありました。15年以上も足尾で森づくりをしています。3月という早い月に熊が鹿の死骸を食べていたという話は初めてでした。また、去年は、夏にカワウが松木川上流に向けて飛んでいった様子を観たのも初めての事。秋には、シラサギが足尾ダム周辺から松木川を飛んでいました。生きものたちも自然界の変化に適応しているのでしょうか。

コロナウイルス感染のパンデミックで見えてきたのは、これからこの地球で生存していくには今までの生活秩序を見直さなければならないということではないでしょうか。つまり、地球の大地と海洋の自然の営みを衰弱させない生存方法をその基準にするということです。

この地球で生存しているということを改めて考えると、謎が多く不思議な力が潜んでいる自然界と向き合う暮らしを創造する時代を迎えている気がします。見えないウイルスは私たちに生きる不安や生きる知恵を教えてくださいました。そのひとつは、これか

らもこのウイルスとは向き合わなければならないことだと思います。

今、地球上では永久凍土や北極と南極の氷が溶けだし、研究者の発表では、この永久凍土や氷の中には新型のウイルスが潜んでいるということが明らかになりました。これまでに発見されているウイルスも感染のチャンスをうかがっているようです。

昨年、サンマやサケが獲れなくなったという報道がありました。四国近海の海水温上昇により、昆布の一種のカジメが激減、カジメを餌にするアワビも激減しました。反面、海水温の上昇はオニヒトデの増殖を助け、その結果、サンゴ礁が食べられ、海藻の生育環境を破壊していることが懸念されています。さまざまな生き物に致命的な影響を与え始めていることがわかってきています。

世界の大地では熱波や森林火災によって土の乾燥が相次ぎ、その土が豪雨によって流されています。日本では、冬の日本海沿いのドカ雪、梅雨時期から夏にかけての豪雨と洪水、夏の猛暑、秋の台風時期には強風と大雨で私たちの暮らしを脅かしています。もはやその影響から逃れる場所はないといっても過言ではないでしょう。

世紀末の世界人口は90億人になると言われています。この「複合災害」と向き合いながら、ポストコロナ社会の“心のふるさと”を会員の皆様と考えていければ幸いです。そのきっかけを、次号から読者に伝えていきます。

広報チーム

森の仲間たち

働く者の心を宿した希望の森を育てたい



昨秋の森作業にて

私と足尾の出会い、労組として森づくりを議論している時の事でした。森づくりを進めていく方針を掲げ、早速、仲間からドングリの苗づくりを始めました。育てた苗をどこに植えるかを森びとに相談しました。森びとは、すぐに、私たちの植樹場所を確保してくれました。

その場所は、足尾・松木沢の「白沢の森」でした。と言っても、場所は頂上付近で、そこは立ってられないほどの急斜面でした。森作業のための階段づくり、穴掘りそしてこの地まで運び揚げた腐葉土等、森作業は重労働そのものでした。

森づくりの知識は乏しく、森びとの皆さんの協力なしには出来なかったことです。多くの仲間たちの協力で植樹を行うことができました。忘れられない事は、植樹後の仲間たちの笑顔でした。

10年が経過し、苗木は大きく生長しているのかと思っていましたら、鹿の食害などで森とは言えない草地の様な状況でした。一昨年、私たちは、再度、枯れた場所に300本の植樹を行ないました。今度こそ大きく育ててほしいと願って・・・。

2020年の10月に足尾の森の環境整備に行きました。当日は、鹿による食害を防ぐための金網と鉄筋を運び揚げました。現場までの森は大きく生長した落葉樹が元気でした。階段を登って、やっと私たちの労組の植樹エリア場所にたどり着くと、1メートル

程に生長した木の若葉が鹿に食べられてしまい、それ以上に伸びられない苗木でした。その上、生長が遅いので、草との競争にも負け、枯れてしまった木々が目立っていました。その場に立って私は、鹿も熊も猿も、そして草も懸命に生きている様子を実感し、森づくの苦労をまざまざと知ることになりました。残念ながら、未だ未だ遠い森づくりが続くと感じました。

世界中で地球温暖化が叫ばれ、2015年には「パリ協定」が採択されました。日本は、2030年までに温室効果ガスを26%削減、2050年度までに排出0%を目指すことを目標にしました。しかし、世界各国からは「野心的な」温室効果ガスの削減が求められています。いま地球上では地球温暖化による異常気象によって災害があちこちで発生しています。日本においても集中豪雨等による災害が多発しその被害は甚大です。

私は労組の「命の森づくり運動」として、足尾での森づくりに参加しました。その過程では、仲間たちと森づくりは私たちの暮らしに関連し、命に欠かせないテーマであることを共に学んできました。今後も、“森づくりは人づくり”を合言葉に、足尾の森づくり活動を継続し、仲間達の平和で安心できる暮らしを願う心を宿した希望の森に育てていきたいと思っています。

森びと広報の森

春が一度にやってきた！

寒い冬が終わりに近づくと植物たちは固い冬芽をほどき始めて薄緑色の葉っぱを開き、黄色や白の可憐な花びらを少し見せてくれます。それなのに昨年も今年も、私たちはウイルス感染の不安から外出や知人に会うことを控えたりして体も心ものびのびと開ききることができないでいます。そんなときは、ぜひどんな環境からも逃げずに生き続けているご近所の草花たちを眺めてみると良いと思います。足元にはしぶとく咲き誇るオオイヌノフグリやホトケノザ、そのお花を虫眼鏡で見るととてもきれいな形と色をしています。目線を少し上げるとトサミズキやヤマブキ、黄色にもいろいろあることに気づきます。さらに見上げるとハクモクレンに続き日本人が大好きなサクラが咲きます。見たことのない花も図鑑とにらめっこして名前がわかると嬉しいものですし、植物は何千とあるので終わることも飽きることもなく、自粛期間中の楽しみにはぴったりです。これは「雨降って地固まる」ならぬ「ウイルス広がり、植物覚える」となりました。

さてそんな楽しみ方をしていたらとんでもないことに気が付きました。先ほど書いたオオイヌノフグリもホトケノザもトサミズキもヤマブキもハクモクレンもサクラも、書いていないシャガもフジもイロハモミジみんな一緒に咲いているのです。ちょっと早すぎて全員がスプリングエフェメラル（早春植物：カタクリやミスミソウなど）状態です。これは

きっと気候変動の影響なのだろうと思わずにいられません。春が短くなってしまうのは寂しいし、四季を通じて移り変わる花々を楽しむのが私の趣味なのでこれは困った事態です。なんとかしなければ、と思い出したのが、大規模な植樹が温暖化の勢い緩和につながると書かれた論文です。植樹の効果は様々な研究でも明らかにされていますし、大地に木を植えるというのは素晴らしい体験です。現在はウイルスのせいで植樹の機会が減っているのが残念ですが、なんと、森びと「里親植樹」が始まるそうではないですか！（9 ページ参照）

状況が落ち着いたらすぐにでも木を植えに行きたいですが、それまでは知人たちに「里親植樹」のことを紹介するなど植樹の PR をしてみようと思います。皆さまもぜひ何かの記念やお子さんとの思い出作りに木の里親になってみませんか、コロナ後に一緒に「私の木」見学ツアーなんかできたら嬉しいですね！

会員 キリ子



ひとこと紹介

メンバーの自己紹介コーナーです。

今回はスペシャリストのアドバイザー、山崎さんと島野さんです。

- 1962 年東京都練馬区生まれ、寅年。武蔵野の草むらで幼少期を過ごす。現在、立憲民主党衆議院議員（神奈川県第 5 区 [横浜市戸塚区・泉区・瀬谷区]）。岸井成格前理事長の薫陶を受けて、文明の岐路に立つ日本の舵取りに邁進。原発に依存しない自然エネルギー100%の環境調和社会、豊かな森と緑、笑顔に包まれる平和な世界を目指しています。（アドバイザー 山崎誠）
- 東京都在住 52 才。農林水産省の研究所に就職し東北に勤務。その後、宮城教育大学を経て、法政大学教授。現在、タイ、マレーシア、ブータンなどで、研究活動、支援活動、自然保護活動をおこなう。土壌動物の観点から森林の保全を目指す。絶滅危惧種の保全も行う。世界中の土壌を広く見てきたので、森づくり土づくりの観点からアドバイス出来れば嬉しいと思います。宜しく願い致します。（アドバイザー 島野智之）

森は友だち

日本経済のためにとして、人が壊した足尾・松木沢の生活の基盤。土砂流出防止に外来種を混ぜた草の種を蒔いたが、半世紀以上も経った今、今度は人間の限らない豊かさを求めた暮らしの行き過ぎが地球を温め、局地的豪雨を発生させて、足尾のその草地を痛めてつけている。中倉山稜線の棲息限界で生きている「無言の語り木（「孤高のブナ」）」の根元の北斜面は、その大雨で根が露出している。

16 年前からふるさとの木の苗木を植えている足尾・松木沢の白沢斜面。私たちは「白沢の森」と称しているが、当時植えた苗木たちは生態の基盤になりつつある。近くの草地にある小さな溝は、毎年の大雨で溝が深く削られ、その幅が広くなり、岩や土砂を流している。「白沢の森」はそこから上流へ 200 メートル程にあるが、大雨が降っても今のところ土砂流出跡はない。地震などで転げ落ちる岩や石は木々がしっかりガードしている。

昨年春、この森で熊の親子が木々の蕾を食べ、昼寝をしていた。この様子を観ていた仲間たちは、大きな声で「おおー！ 本当だ！」と興奮気味になり、嬉しそうだった。夏の森作業でこの森の階段を登っていくと、「いやー！ 涼しいなあー」と言って、私たちの心を和やかにしてくれる。

真夏の足尾の森作業は熱中症に気をつけなければならなくなったが、森の中は木々が作ったきれいな酸素や木々の香り、葉から蒸散する水分で私たちの作業を加勢しているようだ。

脚、腕を動かし、草を刈る作業に苦痛は感じられない。むしろ、生物社会の一員として、当たり前のように働いているようだ。無意識のうちに、「森は大切な友だちなんだ」ということが身体に刷り込まれている足尾の森づくり。

広報スタッフ 高橋佳夫

編集 後記

毎日新聞に「中畑流万能川柳」という小欄があります。忙しい日はそこしか読まないほどのお気に入りですが、ただ面白いだけではなく、考えさせられる深いテーマを持ったものも多く、毎日楽しみにしています。

「核持って絶滅危惧種仲間入り」「神様がややこしくする訳じゃない」「党名のような政治をしてほしい」なんて、「なるほどな」って思いますよね。時事ネタや政治ネタが多い中、気候変動ネタなども時折みかけますがさすがに少数派。では「森の木魂」にも川柳コーナーをつくったらどうでしょう。と安易なる発想で検討を始めました。「図鑑からマイナ

ス 2 月するの花期」「試してる余裕はもうないこの地球」一生懸命ひねってみましたがさすがに簡単にはいきません。われはと思う方、ぜひ、投稿を！ 今ならきっと、秀逸で選ばれること間違いなしです。

前号発行から 3 か月。あっという間に第 2 号の締め切りが過ぎてしまいました。

関係者のみなさん。遅くなってごめんなさい。（「むかしから宿題には追われる派」広報 小黒伸也）



森の木魂（こだま）第 2 号（2021 年 4 月 24 日発行）



発行：森びとプロジェクト

発行人：中村幸人

編集人：森びとプロジェクト編集委員

第二版

〒114-0013

東京都北区東田端 2-9-15 大木ビル 2 階 201 号

TEL&FAX 03-5692-4900

<http://www.moribito.info/>

Email info@moribito.info